

キスタンのミンオイ Ming-Oi [トルコ語にて千佛堂の意]に驚く許り似て居り、其處に猶遺つてゐる彩畫の斷片はセランド風作品と鑑定し得る位で、要するに已に印度を去つて中央アジアに向つたといふ感じを明瞭に抱くのである。此處より再び道を進む事數次、新たにカピシヤ Kapisia 國で幸運を求め事としよう。其の首都カーピシー Kāpisi の名は、ユークラテースの貨幣中に記されてゐるのでよく知れてゐる。今日ではベグラーム Bégām の一般名になつてゐても、其の城市の跡は絶えず發見されて、決して失はれなかつたのである。已に一世紀になるが、米人マッソン Masson が幾千といふ印度ギリシア及びインドシヤの貨幣を得て之を印度會社に送つたのもこゝである。之は今日大英博物館に藏してある。其地形について立契三藏が述べてゐる二點は些の疑もなく確かに同一であるを示してゐるが、今興味を惹くのは、カピシヤに於ける始めての發掘で、一九二四年の秋季にアカン Hackin 氏が、一九二六年の春時にバルツー Barthoux 氏が試みて、ギリシア風佛教派の真正の斷片を齎した事である。此の兩氏が此處で發見した佛菩薩の像や浮彫は、當に様式のみなら